

一、次の文章はある書籍の「プロローグ」中の一部である。この文章を読み、後の問いに答えよ。

A 「問う」とは何をすることでしょうか。しばしば「自分の問いを持て」と職場や学校では言われます。そこでは、解決すべき社会のニーズや、説明すべき学問上のテーマを自分で見つけたことです。要求されます。また、個人の生活でも、進学や就職、転職、さらには結婚など人生の分かれ道で、自分がどう生きるべきか、私たちは自分に問いかけます。そこで求められるのは自分に本当にふさわしい選択について熟^①リヨすることです。さらに、社会や人類に関わる、もっと大きな問いもあります。たとえば、どのような年金制度をつくるべきか、^②リン国とどのように付きあっていくべきか、という政治上の問いがあります。また、気候危機のような地球規模の事^③柄にどのように対処すべきかという、人類の生存をめぐる問いもあります。

これらの「問い」に「答え」はあるでしょうか。もちろん、学校や職場に満足したり、多くの人が納得できる年金制度をつくれれば、それは一定の答えです。けれど、その答えは暫定的なものにすぎません。つまり、あらゆる疑問を消しきる完全な解答ではありません。現在の学校や職場に満足できているのは実際にそこに身を置いている視点からそう思うだけであって、別の学校や職場に進んでいけば本当はもっと充実した生活を送っていたかもしれないかもしれません。また、多くの人が納得できる年金制度があったとしても、当然納得していない人に我^④マンしてもらって制度ができるわけだし、納得した人でも他人に妥協しているはずで、そうすると、「答え」があるといっても、いつでも私たちは、別の選択もできる分かれ道で迷いつづけています。「答え」は「問い」を新しく生み出すだけです。この無力さには、人間であることの根底の^⑤哀しみがありません。

かくも終わりなく、おぼつかない^⑥キョウグウを繰り返すだけなら、「問う」とは虚^{むな}しい行^⑦為で

はないでしょうか。むしろ、問うことなどしないで、そのつどのなりゆきに身を任せるほうが幸せではないでしょうか。問うためには世界の不確かさから目をそむけずに受けとめなければなりません。それだけでも大変なのに、^B一生懸命自分の問いに取りくんでも結局は別の不確かさに直面してしまうのだとしたら、そんなことをしても徒労でしょう。古代ギリシア神話のシーシュポスのように、冥界で^C永遠に巨岩を運び上げるような虚しさがそこにはあります。

けれど、私たちは問うべきです。なぜなら、不確かさに向かいあって問うことは、不確かな世界のただなかに身を置く私たちの生を肯定して引き受けることだからです。この世界には、数えきれない無数の人びとがそれぞれのかけがえのない人生を生きていて、夜空の星々のように、謎に満ちたそれぞれの現実に向かいあっています。「問う」とは、みずから自身のうちにその光を見いだし、いわば、人間であることをあらためて取り戻す行為です。

本書のねらいは、哲学に固^⑧有^⑨のさまざまな「問い」を、人間であることに他ならないこうした「問い」の「賛歌」として示すことです。賛歌は英語でヒム(Hymn)ですが、その語源である古代ギリシア語のヒュムノスはもともと神々や英雄を称賛する歌を意味しました。これに対し、本書の賛歌は、もちろん読者の^⑨皆^⑩さんもふくめて、人間へ向けられています。人間は、今を生きるために、不確かな未来へと問いかけます。その問いは、人の生の果てしない多様さにおうじて、人生の選択から年金制度や気候危機までさまざまです。けれど、問いの言葉は、本人の存在を超えて、言葉を受けとめる他者へと繋がっています。人びとは、問いの言葉をつむぎあって、多様な問いが繰り広げられる^⑩ユイーの場所を織りなします。哲学の問いがめざすのは、この^⑩ユイーの場所へとさかのぼり、問いかける人間そのもののありかたを明らかにすることです。

ただし、哲学は「人間とはこういうものだ」と上から目線で語ったりできません。むしろ、哲学は、哲学者自身には決して手が届かない、それぞれの現実を生きる無数の人間の心のうちを言葉の

あて先とします。誰かが受けとめて、自分だけの「問い」を生きる可能性に気づいてくれることを願う、そうした言葉の営みが哲学です。この意味で、哲学の「問い」は人間の賛歌です。

(景山洋平『問い』から始まる哲学入門』へ光文社・二〇二一年)に基づく

問一 傍線部①②④⑥⑩について、カタカナを漢字にあらためよ。

問二 次に示す表現【a】～【e】は、傍線部③⑤⑦⑧⑨の文字を使用したものである。【a】～【e】のそれぞれの表現のうち、二重傍線部の漢字の読みをひらがなで書け。

【a】横柄な態度

【b】哀悼

【c】為替

【d】未曾有

【e】皆無

問三 波線部A「問う」とは何をすることでしょうか」とあるが、「問う」とはどのようなことなのか。その説明としてもっとも適当な箇所を本文中より十八字以上、二十字以内で抜き出せ。

問四 波線部B「一生懸命自分の問いに取りくんでも結局は別の不確かさに直面してしまう」とあるが、それはどういうことか。その説明としてもっとも適当なものを次の選択肢①～④の中から一つ選び、記号で答えよ。

① 自分にとって最善の選択であっても、他者にとって最善とは限らず、答えを出したとしても最後は争いを生み出しかねないということ。

② 自己の観点から問いを立て、解決を図ったとしても、異なる視点から見れば別の問いが立てられることになり、問いを立てること自体に迷いが生じてしまうということ。

③ 多様な観点から考えて答えを出したとしても、結局は不十分な点や不足が生じ、問いそのものの正確性に疑義が生じてしまいかねないということ。

④ 答えを導き出せたとしても、それは絶対的なものではないがために別の答えを選ぶ余地があり、結局は次なる問いが浮上してくるということ。

問五 波線部C「永遠に」とあるが、これと同義のもっとも適当な五文字の表現を本文中より二つ抜き出せ。なお、解答の順番は問わない。

二、次の文章はある書籍の「はじめに」中の一部である。この文章を読み、後の問いに答えよ。

「濃い」宗教と「薄い」宗教

読者にまずご理解いただきたいのは、宗教には「濃い」レベルと「薄い」レベルとがあるということだ。「濃い」とは、要するに思い入れが強いということである。いわゆる信仰の世界だ。神仏の絶対的な救いを信じて、ふだんから祈りや念仏や座禅などを欠かさない。ときには——いつもそうとは限らないが——排他的になるほどに、自己の堅い信念を守っている。そのようなものが濃厚な宗教、濃い宗教である。仏教、キリスト教、神道、新宗教……の違いに問わず、そのような信仰のあり方というのがある。

「薄い」というのは、もっと軽く、知識や習慣といったレベルで人々に受け入れられているような

宗教的文化のことだ。世界の諸宗教を見渡してみると、ほとんどの人はそれほど濃厚な信仰をもっていない。アメリカの大統領は就任の際に聖書に手を当てて宣^①「セイするが、これは大統領個人の内面的な信仰とは無関係の、社会的儀礼である。多くのアメリカ市民はキリスト教の習慣や聖書の言葉をなんとなく共有しており、人生と世界についてキリスト教的な世界観で語るのが習い性となっている。そういうレベルでのキリスト教が広くアメリカ社会を^②覆っている。このレベルの宗教、すなわち文化や共通語彙としての宗教のことを、本書では^③便宜的に「薄い」宗教と呼ぼうと思う。このレベルで言えば、日本人は「薄い」仏教徒であり、また「薄い」神道家でもある。深い信仰をもたなくても、日本人の多くは諸行無常的な感覚をもっているし、もとのりのりなが本居宣長の言う「もののあはれ」を解する心をもっていると言っている。仏教か神道かどちらかに決めるとうるさいことを言う必要はない。伝統的に仏教と神道はセットとして奉じられてきた。これに儒教や道教の要素も入っている。これが東アジアの伝統的な流儀なのである。

濃い宗教と薄い宗教とはニワトリとタマゴの関係にある。

1

信仰的に強い思い入れのある

個人があちこちにいらっしゃるからこそ、社会全体も神だの仏だのの世界に耳を傾けようかなという気になる。永平寺や高野山に行けば坊様たちが修行をしているという事実があるからこそ、^④不信心な日本人でもなんとなく仏教に一目置き続けている。逆に、すでに社会の中に神仏をめぐる文化や習慣が根付いているのでない限り、個人が濃い信仰を抱くようになるのは困難だ。

宗教家はしばしば、「深い信仰がなければ宗教のことはわからない」と言うが、これはあくまでも一面での真理である。その宗教家だって「深い信仰」を得る前は浅かったはずである。それに、物事の理解には、深さもさることながら、広さも大切である。つまり、あれこれの宗教を横断して眺めるマクロな視点が必要だ。

本書は、読者に「浅く広く」宗教を知ってもらうことを目標としている。浅いというと聞こえが

悪いが、ポイントはマクロな視点にあるとご理解いただきたい。

ちなみに、宗教学というのは、宗教に思い入れるための学問ではなく、宗教をマクロに比較するための学問である。そこには当然、宗教に対する批判の視点が入っている。本書もまた、そういう書き方をしている。

日本人は無宗教か？

日本人は無宗教だとよく言われるが、これはいささか単純な^⑤トラえ方だ。

繰り返しになるが、第一に、もし個人の「深い」信仰のようなものを標準に考えるならば、世界中のほとんどの人々は、それほど深く宗教に思い入れているわけではない。信仰に打ち込んでいる人は、どの世界でも比較的少数であり、そんなのはイスラム世界でも同様だ。逆に、日本人の中にも非常に信仰的な人というのは、それなりに存在している。^A そうでなければ、書店に宗教コーナーや精神世界コーナーがあるはずがない。

逆に、「浅い」文化のレベルで考えるならば、仏教、儒教、道教、神道、あるいは民俗学で扱う民間の宗教的伝統のさまざまな思想や習慣が、日本列島全体を覆っていると言っている。

ただし、日本においては、今挙げたように、宗教が複数並び立っており、どれが主力とも言えない関係にある。

2 このあたり、キリスト教が主流である欧米社会や、イスラム教が主流である中近東の社会などとは異なる。それほど信仰的ではない人でも、たとえばイギリス人であれば「私はクリスチャンです」と言いやすいが、日本人の場合は、自分の宗教は〇〇教であると、はっきりとは言いにくい。となると、何よりも自覚を大切にするキリスト教の教理を基準にとると、日本人は「無宗教」だということになる。

自覚を重視するのは、キリスト教やイスラム教など、一神教である。しかし、インドから東では、

宗教は生活習慣と一体化しており、あれこれの教義を信じるかがどうかがうるさく問われることはない。仏教のように、出家と在家とを区別する宗教もある。出家者は自覚的に戒律に服し、身を律する。在家者はなんとなく^⑥アイマイな立場のままだ。

3

しかも、東アジア社会ではどこでも、^B仏教や道教や儒教がチャンポン状態で信仰されており、そんなところは日本と大差ない。

こうした文化的伝統の違いを理解する必要がある。これは宗教の「浅さ」「深さ」といった区別とはまた別次元の問題だ。どれかひとつの宗教に^Aに打ち込むことは、一神教の世界では大事なこともかもしれないが、日本を含む東ユーラシアの多神教世界ではそれほどでもない。

儀礼への関心の高さ

キリスト教は教理としての信仰を重視し、仏教は悟りや解脱^{げだつ}を得ることを目標とする。そういう意味では、俗世の日常を超えた精神性に^⑦仕える宗教だと言えるだろう。しかし、日本人の場合、仏教式の悟りや安心立命を求めもするが、それ以上に、儀礼の美的な形を守ることを重視する傾向がある。「日本文化は形から入る」と言われている通りだ。

日本には茶道、華道、香道、歌道、剣道、柔道……といったように「〓道」と名のつく習い事や修養のシステムが非常に多い。これらはたいてい精神的な訓戒のようなものを伴っており、宗教の儀礼とほとんど区別がつかない。

ちなみに、茶道は起源的に禅宗と深い縁がある。だから茶室の掛物には禅語などが選ばれる。みなでお茶を回し飲みする儀式が、南蛮渡来のカトリックのミサに似ていると指摘する人もいる（影響関係はよくわからないが）。ミサではキリストを記念して、パンとワインを共食するのである。

興味深いのは、世界の宗教の多くは、戒律という形で、儀礼的所作を守ることを重視しているこ

とだ。

たとえば、イスラム教徒は日に五回メッカに向かって祈るが、この祈りの所作は基本的に決まっている。定まった振る舞いの^⑧「遵守」を見ると、神への無批判な服従と思いたくなるかもしれないが、そうではない。イスラム教徒は、身体から入らないと宗教など^⑨「雲散霧消」してしまうことを知っているのだ。それは、「二期一会」などの理念ばかり説いてお点前の稽古をおろそかにしている茶道家^⑩はもはや茶道家とは言えない、というのと同じことなのである。

4

日本人の宗教について考えるには、こうした習い事の世界までも含めて見ていく必要があるだろう。

インド人の行なう何かしら精神的な意味づけのある習俗の全体をヒンドゥー教と呼ぶ。ヒンドゥーとは要するにインドのことだ。もし、茶道も柔道も、あれこれの祭りも^⑨「ハカ参り」も、外国人にはやはり宗教的に見えるお辞儀の習慣も、あらゆる学校で行なわれている教室^⑩「ソウジ」の習慣も、すべてひっくり返して「日本教」と認識する慣行が成立していたならば、日本人は熱心な日本教徒だとの評判がたっただろう。これは要するに定義の問題である。

（中村圭志『教養としての宗教入門』へ中央公論新社・二〇一四年）に基づく

問一 傍線部①⑤⑥⑨⑩について、カタカナを漢字にあらためよ。

問二 傍線部②③④⑦⑧について、読みをひらがなで書け。

問三 次に示す「脱文」は本文から脱落した文である。この「脱文」が入るもっとも適切な場所を本文中の1と4の中から一つ選び、その番号を答えよ。

〔脱文〕 どちらが先かわからないのだ。

問四

波線部A「そうでなければ、書店に宗教コーナーや精神世界コーナーがあるはずがない」とあるが、このように言えるのはなぜか。その理由についての説明としてもっとも適当なものを次の選択肢①～④の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ① 深い信仰を持つ宗教者が大勢を占めることから、宗教や精神世界関連の書籍の読者もおおずと増えることになるから。
- ② 深い信仰心のある人が存在するがゆえに、さほど深い信仰心を持たない世の中の人も宗教や精神世界に関心を持つものだから。
- ③ 宗教や精神世界関連の書籍を集めたコーナーを作らなければ、深い信仰を心に秘めた人の要望に応えられないから。
- ④ 深い信仰心を持つ人が少数に留まるがゆえに、信者を増やすための布教活動は活発化するものだから。

問五

波線部B「仏教や道教や儒教がチャンポン状態で信仰されており」とあるが、それはどのような様態なのか。四十字以上、五十字以内（句読点を含む）で説明せよ。その際、次に示す【条件①】および【条件②】のそれぞれを満たすように書くこと。

【条件①】「仏教や道教、儒教といった」で書き始め、一文でまとめる。

【条件②】文中に「複数」という表現を入れ、文末は「様態。」で終える。

問六 空欄 ア に入る表現としてもっとも適当なものを次の選択肢①～⑤より一つ選び、記号で答えよ。

- ①排他的 ②社会的 ③文化的 ④儀礼的 ⑤利己的

問七 波線部 C 「雲散霧消」に関連して、慣用表現に関する次の(一)～(三)の問いに答えよ。

(一) 四字熟語「雲散霧消」の読みをひらがなで書け。

(二) 四字熟語「雲散霧消」の意味としてもっとも適当なものを、次の選択肢①～④より一つ選び、記号で答えよ。

- ① 雲や霧のように、とらえどころがなく見方によって異なる姿になってしまうこと。
② 雲が霧に変わるように、ちりぢりになり最後は別物に変化してしまうこと。
③ 雲や霧が消えてなくなるように、あとかたもなく消え失せてしまうこと。
④ 雲や霧で視界が悪化するように、本質を見失い、誤った理解を誘発すること。

(三) 次に示す①～③の a・b の表現について、慣用表現として正しいものはどちらか。正しいものをそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

- | | | |
|---|----------|----------|
| ① | a 藁にもすがる | b 藁をもすがる |
| ② | a 雪辱を晴らす | b 雪辱を果たす |
| ③ | a 一抹の望み | b 一抹の不安 |

問八 次に示す①～④の各文について、本文の内容と合致するものには○を、合致しないものには

×を記せ。

- ① 日本における様々な習俗をも含めて一つの宗教だと理解されないのは、神仏を崇拝することと限定して宗教というものを定義する理解が世界的に定着しているがゆえである。
- ② 宗教学とは微視的あるいは複眼的な見地からそれぞれの宗教を引き比べる学問である。
- ③ 日本人は無宗教だとされるのは、日本人が自身の信仰を他者に明言することをためらう意識を持っており、それが信仰の自覚を重視するキリスト教的な視点とは相容れず、信仰する宗教を持たない民族に見えるからである。
- ④ 「薄い」レベルの宗教というときの「薄い」とは、知識や習慣、儀礼や思想といったものを共有する、いわば文化的なものとして宗教を理解する視点のことである。

三、次の①～⑤の各文について、カタカナで記された傍線箇所を漢字と送り仮名を用いた表記にあらためよ。その際、送り仮名についてはひらがなで記すこと。

- ① しっかりと準備をして面接試験にノゾ^ンダ。
- ② この本は、子どもにも理解できるようにヤサシイ^イ言葉で書かれている。
- ③ これまで以上に丁寧に仕事に取り組み、信頼の回復にツトメル。
- ④ 締め切り日の確認をオコ^タッタために、書類を受理してもらえなかった。
- ⑤ 我が家で飼っている犬はとてもカシコイ。

(以下余白)